

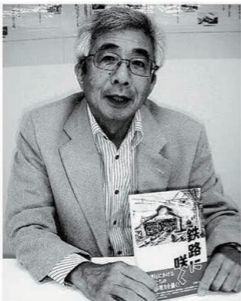
く描闘苦の員道鉄

JR東日本元社員 小説出版

元鉄道マンが小説を出版した。鉄道員たちは安全を第一に、ダイヤ通りに運行すべく努める。それでも災害や事故は起きる。そのとき、鉄道員たちは―。吉野孝治さん(名)＝千葉市緑区Ⅱの「鉄路に咲く」(ツイッソーリユーション)は、四十年近い鉄道人生を基に現場の姿を活写。鉄道ファンでもつかない知らない苦闘が描かれる。

(小鷲正勝)

事実基にした7作品収録



創作仲間が描いた表紙カバーの著書を手にする吉野孝治さん

吉野さんは一九六五年、国鉄(千葉鉄道管理局)に入った。「非番日の閑々とした空虚さのなかで、この日々をどう活用したらいいものか」(同書あとがき)と悩むうち、国鉄文芸年度賞の存在を知った。先輩に創作の魅力を教えられ、三十歳前後から創作にいそむ。以後、同年度賞では入賞の常連となった。

JR東日本となって駅長

(両国駅)に就くころ、上司から「小説よりも社員管理たるう」と諭され、創作活動を断念。二〇〇三年に新浦安駅長を最後に退職し、十数年の空白を経て創作を再開した。一五年には東日本鉄道文芸年度賞で優秀賞を獲得している。

「鉄路に咲く」は、鉄道小説7作品をおさめる。

一九八七年の千葉県東方沖

地震は、最大で震度5(當時)を記録した。「冬の夕陽」では本線、支線とも線路陥没や地盤沈下、通い狂い(線路が左右にうねってしまいう現象)に直面した保線区。復旧させるにはどう動くべきか。

「軋む音」は見習い運転士が主人公。ブレーキが緩まなくなる不具合(緩解不良)があったため発車が数分遅れ、途中の駅ごとに少しずつ遅れを取り戻していく。が、人身事故に遭遇。轢断遺体の処理をしてから運転を再開したのだが…。

「作品は、ほとんど事実をモチーフにしている」と吉野さん。「事故や災害などが起きると鉄道員たちがどれだけ苦悩しているか、安全運行のために取り組んでいる姿勢を知ってほしい」と語っている。

「鉄路に咲く」は千五百円(税別)。問い合わせは、ツイッソーリユーション＝電052(799)7391へ。